953 マルタン・デュ・ガール，ロジェ
M チボー家のジャック
山内義雄訳
東京 白水社 1970
368 p. 21 cm
Roger Martin du Gard
《Jacques Thibault》

訳者略歴
1894年生．東京外語仏語部卒．京大法学部中退．
早大教授停年退職．日本芸術院会員．
主要訳書 マルタン・デュ・ガール「チボー家の人々」「ジャン・バロワ」
ジード「狭き門」「贋金つくり」
ブールジェ「弟子」，エクトル・マロ「家なき子」
テェマ「モンテクリスト伯」，エモン「白き処女地」

チボー家のジャック

¥ 650

1958年9月20日第1刷発行
1970年2月20日第21刷発行

訳 者 © 山内義雄
発行者 草野貞之
印刷所 東洋経済印刷
発行所 東京都千代田区神田小川町3の24 株式会社白水社
電話東京(291)7811(代) 振替東京33228

郵便番号 101 大光堂製本

(分)0097 (製)70070 (出)6911

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

チボー家のジャック

少年版『チボー家の人々』

マルセル・ラルマン編

山内義雄訳

白水社

チボー家のジャック

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Titre original:
JACQUES THIBAULT
Auteur:
ROGER MARTIN DU GARD
Éditeur:
LIBRAIRIE GALLIMARD
Date:
1946

Original copyright by Gaston Gallimard, Paris.
Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokio.

目次

第一部……七
第二部……一四五
第三部……二七五
訳者あとがき……三六五

第一部

一

ヴォジラール町のかど、ふたりがすでに学寮の建物にそって歩きはじめていたとき、みちみちひと言もむすこに話しかけなかったチボー氏はとつぜん立ちどまった。

「いや、アントワーヌ、そうだ、今度という今度はがまんができん！」

青年は答えなかった。

学寮は、もうしまっていた。夜の九時だった。門番がくぐり門をほそめにあけた。

「弟はどこにいる？」と、アントワーヌがどなった。相手は、目をみはった。

チボー氏は足を踏みならした。

「ビノ師を呼んでくれ。」

学寮は、司祭たちの手で経営されていた。生徒はすべて半寄宿のしくみになっていて、中学の授業をすませたあとを、ずっと学寮ですごすことになっていた。

門番は、ふたりの前に立って応接室まで行くと、ポケットから小さいろうそくを取り出し、しょくだいに火をつけた。

何分かがたった。チボー氏はいきを切らしていたので、いすにぐったり腰をおろした。彼は、歯を食いしばりながら、ふたたびつぶやいていた。

「今度という今度は、そうだ、今度という今度こそは、だ！」

「ごめん下さいまし。」音も立てずにはいってきたビノ師が言った。とても小作りなので、アントワーヌの

肩に手をおくには、背のびをしなければならなかった。「これはこれは若先生、いったいなにごとが起りました?」

「弟はどこにおります?」

「ジャックさんですか?」

「朝からまだもどらんのです!」と、いすから立ちあがったチボー氏がさけんだ。

「どこへいらしったんでしょう?」司祭は、たいしておどろいたようすも見せずに言った。

「ここですよ!《とめおき》になっているんです!」

司祭は、両手を帯の下にすべりこませた。

「ジャックさんは、《とめおき》になってはおられません。」

「なんとおっしゃる?」

「ジャックさんは、きょう学校に見えませんでした。」

事はむずかしくなってきた。アントワーヌは、じっと司祭を見つめていた。チボー氏は肩をゆすった。そして、ぼてぼてした顔を司祭のほうへふりむけた。その重いまぶたは、かつてあげられたためしがほとんどなかった。

「ジャックはきのう、四時間の《とめおき》になったと言っていました。けさはいつもの時間に出て行きました。それから十一時ごろ、ちょうどわたしどもがみんなミサに行っていた留守に帰ってきたらしいです。家には、料理係の女中しかいませんでした。やつは、四時間のかわりに八時間の《とめおき》をくったので、昼飯には帰らんと言って出て行きました。」

「まったく作りごとでございますよ。」と、司祭は言葉に力をいれた。

「午後にはおそく外出しなければなりませんでした。」と、チボー氏は言葉をつづけた。「《ルヴュ・デ・ドゥ・モンド》社に《学界報告》の原稿をとどけに行きました。編集長に会っていたので、家へもどったのはようやく夕食の時分でした。ところが、ジャックはもどっておらん。八時半になったが、それでももどらん。そこで心配になりだしましてな、病院で宿直のアントワーヌを呼びにやりました。そして、こうしてふたりで伺ったわけなのです。」

司祭は、何か考えているようすで、くちびるをつまんでいた。チボー氏は、そっと目をあげて、まず司祭のほうへ、つづいてむすこのほうへ、するどいまなざしを投げた。

「どうだ、アントワーヌ?」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「おとうさん、」と、青年が言った「計画的な家出だとすると、何かまちがいでもあったんじゃないかという推定はなりたちませんね。」

彼の態度は、人をおちつかせた。チボー氏は、いすをひきよせて腰をおろした。すばしこい彼の頭は、いろいろと家出先のことを考えていた。だが、その顔は、あぶらのせいでにぶい感じで、なんの表情もうかがわれなかった。

「どうだ、」と、彼はくり返した「どうしたものだろう?」

アントワーヌは考えた。

「今夜のところは、このままですな。待つことにしましょう。」

それはたしかにそうだった。だが、すべてを親の威光によってかたづけられないということ、そして、翌翌日にはブリュッセルで精神科学会議がひらかれ、自分がそこでフランス部会の司会をするように頼まれていたことを思い出すと、チボー氏の顔には、さっとふんがいしたような色があらわれた。そして、いすから立ちあがった。

「憲兵の手で、どこもかしこもさがさせてやります!」と、彼はさけんだ。「フランスには、しっかりした警察制度がありますからな。悪いことをしたやつは、みんなつかまえられずにはいませんからな!」

モーニングは、腹の両がわにたれていた。あごのあたりのひだは、絶えずカラーのさき二つにつままれていた。そして、彼はまるで手綱をひっぱる馬といったように、あごを前のほうにつき出してはがくがくやっていた。《ろくでなしめ。》と思った。《いっそ汽車にでもひかれてしまえばいいんだ!》たちまち、万事はつごうよくいくように思われた。会議での演説のことか、たぶん副議長に選ばれることなど……だが、同時に、たんかにのせられたむすこの姿がありありと思い浮んだ。それにつづいて、ろうそくのあかあかとともされた通夜のへやの中での、かわいそうな父親である自分の姿、それに人々の同情など。彼は気恥ずかしく思った。

「こうした心配で一晩を明かすなんて!」と、彼は高い声で言葉をつづけた「つらいですな、司祭さん。父親にとって、こうした一刻一刻をすごすというのは、なんともつらいことですな。」

彼は、戸口のほうへ行きかけていた。司祭は、帯の下から手を抜き出した。そして、

「失礼ですが。」と目を伏せながら言った。

しょくだいの灯は、たれさがった黒い髪になかばかくされているその額と、あごのところまで三角形になって細まっているその陰険そうな顔を照らし出していた。ほんのりしたあかいかげが二つ、彼のほおのうえに浮んでいた。

「じつは、今晩すぐに、御令息についてのちょっとした問題をお耳にいれていいものかどうか、ためらっていたのでございますが――それも、ごく最近のことでした――しかも、そのこと自体、きわめてこまったことでございまして……が、なにしろ、何かの手がかりにはなるだろうと思っております……もしお急ぎでないようでしたら……」

ピカルディー（注・フランスの東部。）なまりが、彼のためらいを、さらに重苦しいものにさせていた。チボー氏は、なんにも答えずに、自分のいすのところまでもどると、目をとじて、そこにずっしり腰をおろした。

「じつは、」と、司祭は言葉をつづけた「最近御令息につきまして、ちょっと変った性質のあやまち……きわめて重大なあやまちを発見したのでございました。……退学させると申しておどしさえもいたしました。それはもちろん、ほんのおどしにすぎませんでした。何かお聞きにはなりませんでしたか？」

「御承知のとおり、あいつ中々の偽善者でしてな。例によって例のごとく、口をつぐんでおりました！」

「御令息には、なるほど重大な欠点もおありになります。でも、けっしてしんから悪いお子さんではおありになりません。」と、司祭は言いなおした。「しかも今度の場合のごとき、まったくお気の弱さから、ほかの者にひきずられておやりになったものと考えております。パリでよくある危険な友だちによる感化、堕落した少年たちの感化というようなものでございまして……」

チボー氏は、不安そうなまなざしを司祭に注いだ。

「順序を追って申しあげますと、じつはこうしたわけでございます。この木曜日のことでございました……」司祭は、ちょっと考えこんだ。そして、ほとんどたのしそうな調子で言葉をつづけた「いや、まちがいました、一昨日、金曜日でした、そう、金曜の午前のちょうど自習時間のときでございました。正午少しまえ、わたくしは、いつものように、さっとへやの中にはいってまいりました……」彼は、アントワーヌのほうを向いて目ばたきをしてみせた。「戸が動かないように心をくばって、急にとってをひねります。そして一気にぱっとそれをあけます。で、はいって行くな

り、わたくしはジャックさんのほうを見ました。戸口の正面のところにおすわらせ申しておいたのでした。わたくしは、つかつかと前へ行って、机のふたをあけてみました！　そして、わたくしはおさえました！　見事あやしい書物をおさえました。それは小説本でございました。」

「けしからん！」と、チボー氏が叫んだ。

「まずジャックさんに、運動場に立っているように命じておいて、それから机を調べにもどってきました。最初見たところ、べつにあやしいものはありませんでした。ところがさて机をしめようとして、ふと、教科書の並んでいるうしろに手をやってみる気になりました。そして、そこから灰色クロースのノートを一冊ひき出しました。ちょっと見たところでは、たしかになんらあやしいものと思われませんでした。が、なにしろそれをあけてみました。そして、はじめの何ページかをさっとひとわたり読んでみました……」司祭は、鋭い、やさしみのないまなざしで、キッとふたりのほうを見つめた。「何から何までわかりました。わたくしは、その獲物を安全なところに保管しました。そして正午の休みのあいだに、ゆっくり調べてみました。小説は、ていねいに製本されておりまして、背中の下のところには、Fというかしら文字がついておりました。いっぽう、灰色のノートのほう、すなわち主要物件たるところのもの――証拠物件でございますな――それは、連絡帳とでもいったようなものでございました。書体は二つともまったくちがっておりました。一つはジャックさんのもの、これにはJという署名があり、も一つのほうは、だれのものともわかりませんでしたが、署名はかしら文字のDとなっておりました。ところでその見なれない筆跡が、ジャックさんの御友人のものということがわかりました。幸い、それはこの学寮でのジャックさんの御友人ではなく、たしかにジャックさんが中学校で友だちになられた少年のように思われました。わたくしは、たしかなところをつきとめようと思いまして、即日、生徒監をたずねました――あのキャールさんのところへですが。」と、彼は、アントワーヌのほうをふり返りながら言った。「たちまち相手はわかりました。Dと署名しているけしからん少年は、四年級の生徒、ジャックさんのお友だちで、フォンタナン――ダニエル・ドゥ・フォンタナンという名の少年でした。」

「フォンタナン！　あれだ！」と、アントワーヌはさけんだ。「お父さん、夏、メーゾン・ラフィットの、

森のそばにくる一家があるでしょう？　そうでした、この冬も、夕方家へ帰ってきたとき、なんべんとなく、ジャックが、そのフォンタナンという子から借りてきた詩集を読んでいるのを見かけました。」

二

「なんだと？　書物を貸してもらったと？　なぜわしに言わなかった？」

「たいして危険なもののようにも思われなかったからです。」と、アントワーヌは、さも司祭へあてつけるといったように、彼のほうを見つめながら言った。そしてとつぜん、ちらりと通りすぎたきわめて若々しい微笑のかげが、考えぶかげなその顔を輝かした。「ヴィクトル・ユゴーでした。」と、彼は説明した「またはラマルティーヌでした。ぼくは、いやおうなしに寝かせてやろうと思って、いつもランプを取りあげてやりました。」

司祭はくちびるにしわをよせていた。そして、アントワーヌをやりこめるようにこう言った。

「ところが、さらに重大なことは、そのフォンタナンという少年がプロテスタントなのでして。」

「知っております！」と、チボー氏は、こまりきったようすでさけんだ。

「もっとも、かなり良い生徒ではありました。」と、司祭は、自分の公平さをしめそうとして、すぐにあとからつけ加えた。「キャールさんはこう言っておいでした。《上級の生徒です。まじめらしい生徒でした。みんなをだましていたんですな。母親というのも、もっともらしい人でした。》」

「おお、母親、母親……」と、チボー氏は言葉をはさんだ「たといちゃんとしたようすはしていても、なかなかくえない連中です！　メーゾン・ラフィットでは、だれひとり客によぼうとするものはありませんでした。あいさつするのがせいぜいでした。いや、お前の弟も、えらくりっぱなお仲間をこしらえたわけだな！」

「なんとも危険なお仲間でございました。」と、司祭はためいきをついた。「何はともあれ、中学校で何から何まで教えてもらって帰ってきました。そして、いよいよ規則にしたがって、査問会を開く段取りになりましたが、きのう、土曜日、朝の自習時間のはじめにあたり、ジャックさんはとつぜんわたくしのへやに飛

びこんで見えました。文字どおり飛びこんで見えました。まっさおな顔、そして、歯をくいしばっておいでした。戸口をはいるなり、おはよう！　をさえおっしゃらずにこうおどなりになりました。《本をぬすまれました！　書いたものをぬすまれました……》わたくしはまず、そんなふうにしてはいってきてはいけない！　と御注意申しあげました。だが、耳もおかしになりません。いつもあれほどずんでおいでの目も、怒りに燃えて暗く血走っておりました。《あのノートを、先生がとったんです。先生が……》と、おさけびになりました。しかも、」と、司祭は、愚直らしい微笑を浮べながらつけ加えた「《もしあれを読まれたら、ぼくは自殺してしまいます！》とさえおっしゃるのでした。わたくしどもは、なんとかおなだめしようと思いました。ところが、こちらに口もおきかせになりません。《ノートはどこにあるんです？　出して下さい！　出してくれなければ、何から何までぶちこわしてやるから！》そして、おとめするひまもあらばこそ、たちまちわたくしどもの机の上にあったぶんちんをお取りになりました――アントワーヌさん、あなた、あれを御存じでしたな、あの、卒業生たちが、ピュイ・ドゥ・ドームから記念に持ってきてくれたあれなんですよ――そして切込暖炉の大理石を目がけて、力まかせにお投げつけになりました。いやなに、たいしたことではございませんが。」司祭は、チボー氏が申しわけなさそうなようすをしてみせたのに答えて、急いで言葉をつけ加えた。「こんなつまらないことまで一々申しあげますのも、じつは御子息様がどんなに興奮しておいでだったか、おわかり願いたいと思いまして。さて、そのあとでは、はげしい神経的な発作をお起しになり、床の上をころがりまわっておいでした。わたくしども、やっとおつかまえ申して、隣りの小さな暗唱室に入れ、しっかりかぎをかけたのでございました。」

「おお、」と、チボー氏はこぶしを高くあげながら言った「時によって、まるでつきものがしたようになることがあります！　アントワーヌにおたずね下さい。なあ、ちょっとした気にくわんことがあると、気ちがいのように怒りだし、いやでも我を通させてやらなければならんようなことがあったじゃないか？　顔色はまっさお、首すじのあたりには血管がふくれあがって、怒りにかられて、まるで相手をしめ殺しかねないようになったことが。」

「さ、そうした点では、チボー家の人間は、だれもか

れもが乱暴ものですよ。」と、アントワーヌも認めた。だがそこには、それを残念に思うといったようすはほとんどなかった。そこで、司祭は、あいそ笑いでこれにたいすべきであると考えた。

「それから一時間しまして、へやからお出ししようと行ってみますと、」と、司祭は言葉をつづけた「テーブルの前に腰をかけて、両手で頭をかかえておいでした。そして、わたくしどものほうを恐ろしい目つきで御覧でした。冷たい目をしておいでした。わびをなさるようにとおせめしてみましたが、なんのお答えもありません。髪をふり乱し、じっと下を見つめたまま、ごうじょうなようすで、おとなしくへやまでついておいでになりました。わたくしはぶんちんのかけらを拾っていただきました。だが、がんとして口をおひらきになりません。そこで今度は、御堂へお連れ申しました。そしてたっぷり一時間というもの、ただひとり、そこで主とさし向かいにおさせしておこうと思いました。その時間の終りに、わたくしはおそばへ行ってひざまずきました。そのとき、どうやら泣いておいでだったらしく思われます。が、なにしろ御堂の中は薄暗いことです。はっきりそうとは申せません。わたくしは、低い声で、十ばかりお祈りをとなえました。それからおさとし申しました。悪友のため、たいせつなきみの純真さが危くされていると知られたとき、御父上はどんなにおなげきになることだろう、というようなことをお話し申しあげました。御子息は、腕を組み、ぐっと顔をあげ、目はじっと祭壇のほうへ注いで、まるでわたくしの言葉がお耳にはいらないようでございました。いつまでもごうじょうを張っておいでになるので、わたくしは、自習室におもどりになるように申しました。ところが夕方になるまで、そこの御自分の席に、あいかわらず腕組みをしたまま、書物一冊開こうとせず、じっとすわっておいでした。わたくしは、わざとそれに気がつかないようなふうをしておりました。七時になると、いつものようにお帰りでした——だが、とうとうさよならを言いにはお見えになりませんでした。まあ、これがすっかりのお話でして。」と、司祭はまなざしに興奮の色を浮べながら言葉を結んだ。「じつは、中学校の生徒監のほうで、例のフォンタナンという子供にたいしてどうした処罰をいたしますか、それがわかってからお知らせいたそうと思っておりました。あきらかに、退校処分になりましょう。しかし、今晩こうして御心配のごようすをお見うけしますと……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com